

日本軍（第三十二軍司令官隷下指揮下部隊）
 戦死 約七万五千 負傷生存者約二万五千の過半數
 右の外沖繩島民（非戦闘員）の死者約五万と推定せらる
 米軍

日本軍側の統計

地上戦果

人約八万五千

火砲約二百五十

戦車約七百

米軍側の發表

地上損害

人戦死約一万 負傷約二万七千 約三万七千

海上の損害

大、中、小破二三

沈没

三五（驅逐艦以下三五）

（10832 含む）總計 258

海上戦果

大破炎上 約三百九十

小中破 約三百三十

約六百二十

戦死四九〇七 合計九七三一
 戦傷四八二四

約二割は沖繩作戦軍との
 交戦の結果と推定す

第五 観 察

其の一 米軍の作戦

米軍の沖繩攻略戦は戦術戦術共に其の歴大なる物量の威力を最高度
 に發揮することを根幹としあり即ち術策を排し物的威力を至當に判
 断し之に立脚する安全確實にして人命の犠牲を極減する戦法を採用
 せり作戦目的に向ひ陸海空戦力を徹底的に結集せる事實先づ慶良間
 群島を奪取して渡洋作戦に伴ふ不安定感を一掃せる處置上陸點を嘉
 手納海岸に選定し且此處に全戦力を傾倒して實施せる上陸爾後日本
 軍主力の背後に新上陸作戦を行ふことなく陸正面戦線を以て押
 し切る戦法本部半島を攻略したる後初めて伊江島に上陸せる作戦振
 り等飽く迄確實且慎重然も作戦の本筋を行く堂々たる法にして精神
 力術策戦機等は多く拘泥せざるものあり殊に我が主陣地帯の攻撃に
 於て巨大なる物量に依り地下一切我が軍を無に歸したる後にあらざ
 れば前進せざる傾向顯著なりしは米軍戦法の特色中の特色と謂ひ得
 べし以下米軍作戦中の重要問題の個々に就き若干觀察を記述すべし

一 米上陸軍は何故に純機甲兵團を使用せざりしや米軍の誇小鐵量に對しては我が土量を以て之に抗し得終局に於て我が軍に止めを刺したるは米軍の戰車なり若し米軍にして歩兵師團の外に有力なる機甲兵團を保有し大陸作戰に於ける其の如く大戰車集團從深一舉突破戰法を採用したらんには實際より途かに迅速に且損害少くして沖繩攻略の目的を達し得る

二 米軍は四月下旬以降何故に我が軍主力の背後に新上陸作戰を行わざりしや四月下旬我が軍は海面防禦に任じありし第二十四師團及獨立混成第四十四旅團を北方陸正面に轉用し我が軍の背後は全く無防備の状態となれり若し四月下旬以降米軍にして我が背後海正面に新上陸を實施したれば我が軍の潰滅は一層迅速ならしめん敵が斯かる企圖に出でざりしは我が軍背後の状況不明（我が行動部署を秘匿するに有ゆる努力を傾注せり）茲に敵前上陸の困難性（硫黃島經驗）の何處に基固するところ多きが如し本問題に關しては米軍内部に於て深刻なる論争ありしと聞く

東京小津橋

陸軍

三 首里戰線より喜屋武地區への敵の追撃作戰は緩慢す米軍にして若し我が退却途中に於ける地域的持久抵抗を排し斷呼たる追撃を敢行したらんには我が軍は喜屋武地區に於て態勢を整ふる暇なく潰滅したるならん勿論我が軍持久抵抗の部署状況且抵抗頑強なりし爲とも見做し得べしと雖も米軍の追撃企圖だに斷固たるものあらば戦力殆ど盡きたる我が軍を急迫するは必しも困難ならざるべし或は首里戰線二ヶ月間の從深抵抗戰に機動戰法を忘れたるか若は我が抵抗陣地の從深が更に沖繩島南岸に及ぶと判斷せるものならんか

四 米軍は案外我が軍の企圖配備を承知せずして作戰を指導せるものなり如し米軍は嘉平納海岸には我が軍が強力に守備しあるものと判斷し徹底せる砲撃の後上陸を實施せり爾後日本軍主力は北方國頭郡方面に在るものと予想し最精銳と目せられたる海兵軍團を北方に使用し且我が軍主力の直野灣東西の陸正面陣地は第一線の激突したる後之を確認し且初めて我が作戰企圖を承知せるものなり如し

其の二 航空優先主義と沖縄作戦

現代戦特に大洋島嶼作戦に於ては航空戦力が殆決定的威力を有するは理論上は勿論沖縄作戦に至る迄の大太平洋作戦に於て米空軍が明白に實證せり我が統帥部が斯かる事實を認識するは可なるも我が空軍も亦大洋作戦に於ける決戦兵種なるかの如き錯覺に陥ひりマリアナ作戦以來次々と其の無力にして到底其主作戦たる價值なきこと幾回となく體驗しつゝも遂に最後に至る迄迷妄的信念より脱却する能はざりしは遺憾なり

航空優先思想に成る我が大太平洋作戦計畫に於て地上兵種は航空基地警備隊式に所要に充たざる兵力を以て無数の島嶼に分散配置せられ情勢緊迫するも自ら作戦準備を犠牲とし航空基地の建設に使役せられたり然も一度戦闘始まるや戰場上空には我が機影となく地上部隊は微弱なる兵力と頗る不十分なる作戦準備を以て孤子戦闘し旬日を出でずして全滅し血と汗とに依り漸く完遂せる飛行場は我が空軍の殆と使用することなくして敵手に入るを常とせり若し我が統帥部

東京小津野

陸軍

にして我が空軍の價值を至當に判断し之に分相應の役割りを與へ眞に重要な島嶼には十分なる地上兵力を配し作戦準備の餘裕を與へる如く作戦を立案指導したらんには敵上陸軍を撃推し得る機會尠少なからざりしと思考す以上の主張は我が南西諸島に於ける地上兵力配置及作戦準備に就ても略々同様と謂ひ得べく殊に戦闘開始後軍に無暴なる攻勢を強要せしが如きは誤れる航空至上主義の最も顯著なる悪例なり

其の三 兵力配置の無重點性に就て

大太平洋上無数の島嶼に數日若は旬日出ずして潰滅すべき地上兵力を配置するに至りしも主因は前述の如く航空至上主義の誤れる思想に出でたるものなるも亦反面戦術の根本的検討の不十分と守備すべき眞に重要な島嶼を判断し得ざりし戰略眼の缺如も亦重要な因子として擧げざるを得ず南西諸島に對する敵上陸戦の本質的諸條件を検討せば徳之島、大東島、石垣島等の兵力は殆と無用と謂ひ得べく又比島決戦の増援すべき兵團としては沖縄島より第九師團を抜くこ

となく軍の意思を採用し宮古島南西諸島各島嶼の兵力配置は大本營の決定せしところとなり雖も第三十二軍が實情に應じ至當と判斷する意見を強硬に具申し且中央をして之を理解せしむるの努力に於て不十分なりと謂いはざるべからず

其の四 作戰準備の一貫性に就いて

制空制海權を把握し比較を絶する物的威力を以て攻撃し來る敵に對しては彼我略々同等の兵力を以て相戦の一般作戰の場合と異り作戰準備の完全こそ絶体必要なり我が沖繩島に於ては概ね所望の作戰準備を完成する爲には築城に五、六ヶ月訓練に二、三ヶ月合計七、八ヶ月を必要とせり然るに實際に於ては地上作戰準備を開始せるは昭和十九年八月下旬（九月一杯は飛行場建設に従事せり）にして築城訓練漸々進み全軍の將兵は方々必勝の自信力を得としつゝある同年十一月下旬軍の中堅兵團たる第九師團たる第九師團を台灣方面に轉用せられし爲に作戰計畫を根本的に變更し作戰準備を新に發足するの止むを得ざるに至れり

過去數日に亘り全命を打ち込み努力したる作戰準備を放棄せし失望落膽せる將兵を驅つて新なる作戰準備に轉換邁進せしめ得れば實に昭和二十年一月以後のことと屬し軍は僅か二、三ヶ月にも達せざる準備を以て戦闘を開始するに至れるものなり

又彼の捷號作戰準備に於て無き兵團を逐次増強せられ其の度毎に軍は作戰計畫變更の必要に迫られ先著兵團は次々と部署を改め且陣地を移動せり將來を遠觀洞察せる一貫性ある統帥の望ましきは以上の例に依るも明瞭なり

其の五 戰略持久と決戰攻勢

軍の作戰計畫は本土決戰の爲に戰略持久を方針として策定せられ軍の兵力、地形、島嶼、廣狹竝に制空制海權言語に絶すべき熾烈なる砲撃下壓倒的優勢なる敵と戦闘すべきことを十分に検討し主陣地を島尻南部に壓縮選定し北、中飛行場方面に敵が上陸する場合は之を攻撃せず陸正面に於て持久し敵が主陣地帯沿岸に上陸する場合は之を海岸地帯に撃滅する如く諸般の作戰を準備せるものなり然るに北

中飛行場の價值にのみ拘泥し之が確保若は敵の使用妨害の具体的綜合的なる手段方法を研究せざる中央統帥部は戰鬪勃發するや（勃發前より其の意志表示あり）軍主力を以てする出撃を強要して止まず爲に最重要なる最初の一ヶ月間に於て

イ、四月八日の總攻勢

方に攻撃を開始せんとして止む此の前後數日間は司令部内論争攻撃計畫の立案、命令傳達に轉移せる各上級の司令部本部も亦同様の状態なり

ロ、四月十二日の夜襲

歩兵約五ヶ大隊を使用す二ヶ大隊は殆全滅一ヶ大隊は半滅他の二ヶ大隊は相當の損害を受く、之が爲第六十三師團の防禦態勢紊亂し敵に乘ぜらるゝ因となり第二十四師團の北方圍方面への進出第一歩先づ混亂す

ハ、五月四日攻勢

第二十四師團は精銳の大部を失ひ軍砲兵隊彈藥を殆消盡し軍全

般の防禦態勢は崩壞に瀕せり

の如き作戦行動を取るの止むなきに至れり實に痛恨の極にして斯る諸攻勢が如何に無暴愚劣なるかは用兵の根本原理に立脚し活眼を以て之を觀れば明白なり若し中央統帥部若は方面軍司令部に有識の士ありて單に大規模なる攻勢を要求せず又軍内に攻勢論起りても之を未然に防止する如く指導したりとせんか第三十二軍の戰略持久戦は一貫せる方針のもと齊整たる部署を以て實施せられ更に偉大なる戦果を擧げ得べきを確信す

其の六 部隊の戦力

部隊の戦力が指揮官の精否の作戦準備及訓練の度に依り著しく上下するは今も昔も渝らざる眞理なり略々同素質の軍隊に於ても有能なる指揮官の指揮する部隊と然らざる部隊とにては戦力三對一以上に開きを生じ 日本人より成る部隊にしてありながら第一線戦鬪部隊と後方關係人員を以て臨編せる部隊としては戦技は勿論のこと其の根本的精神に於ても果して同一國の軍隊かと疑はしむる程の優

劣を生ず又作戦準備の度如何は弱者の戦闘の場合には特に深刻なる影響ありて戦闘初期自ら陣地に據り戦闘せる第六十二師團の獨立歩兵第十三、十四大隊と爾後臨機前線に増加せられたる部隊との間には其の防禦力自ら相異れり

其の七 砲爆の價值

數十万に達する敵の砲爆も我が沖繩に於ける地下陣地に對しては猛威振ふに由なく陸上戦闘最後の決は米軍の戦車に依り定まれり日本軍は常に米軍の物量戦法に敗れたとは一般の常識なり事實に此の常識には誤りなきも我にして之に抗する方法を徹底せしめる場合に於ては必しも常に然りとは斷ずるを得ず

若し米軍にしてクゼリン島の攻略の際使用したると云ふ鐵量(一兆六千万一屯)を我が沖繩の主陣地内全域に撃込すと欲せば實に二億五千萬もの鐵量を要するなり然るも尙地上に存在するものはいざ知らず地下に據る者は必しも之を制するを得ず我が主陣地帯の攻撃に於て米軍は其の砲爆の威力信じて陣地内に進入し來るも至る處地下陣

地内よりするの抵抗に會せり我が軍にして作戦準備に更に數ヶ月の時日の餘裕を有し陣地の編成構築部隊の訓練完成し然も戰略持久方針より逸脱せざる戦闘を實踐したるとせば米軍の物量に抗し赫々たる戦果を擧げ得たるなり

其の八 沖繩作戦を通じて觀たる日本軍及日本人の特性

沖繩作戦に参加せる將兵の忠誠勇武及戦闘能力は單なる抽象的理想論や實情を審にせざる皮相觀に依らず且今(古東西の戦史に比較して觀察するとき第一級に屬するものなりと斷言し得べし殊に古今未曾有の悲惨なる戦況に處し十万の大軍が八〇%内外の損耗を出すも上下一致志氣尙衰えず相率ひて首里戦線より喜屋武半島地區に後退し鐵石の團結を保持しつゝ殆人全滅に至る迄敢闘せし功績は單に我が第三十二軍のみにとどまらず日本軍及日本人全般の爲万丈の氣を吐けるものと謂ひ得べし

然れども如何なる事態にも其の裏面をのぞけば若干の難點存するは自然なり以下此の部分的難點に依據し日本軍及日本人の共通の短所